

カササギの生息実態調査 (Ⅲ)

一 営巣の分布と生態 一

佐賀県林業試験場 松尾 保則

1. はじめに

カササギは、佐賀県を中心に、隣接する福岡県、長崎県の一部に生息しているカラス科の留鳥で、カササギの生息地域が大正12年3月に国の天然記念物に指定されている。

さらに昭和40年5月には、佐賀県の県鳥に指定し保護している。

本県におけるカササギの調査研究は古くから続けられているが、いずれも小地域に限って、その生態構造をとらえたものが多く、全県的に生息調査を実施したのは、県が昭和45年からである。

2. 調査方法

調査は、昭和59年3月1日から4月31日までの繁殖期に実施した。

調査にあたっては、県鳥獣保護員36名の協力を得て県下全域にわたりカササギの営巣対象物、地上からの巣の高さ、被害状況等について記録するとともに、生息数及び生息密度を把握するため営巣場所を地形図(5万分の1)にチェックした。

3. 結果と考察

1) 営巣分布と生息数

カササギの営巣県内分布および生息密度をみると(表-1、図-1)背振・天山山系の5町村を除く地域の平坦部が生息地ならびに営巣地となっている。

特に佐賀市を中心とする有明海沿岸の平野部に集中している。また山麓地帯での営巣の限界は、標高200m位までであった。

さらに詳細に地域の特長をみると、県東部地域の平野部一帯に全営巣数の76%が集中しており、なかでも佐賀市、佐賀郡平坦部に48%を占め、つづいて県西部の有明海沿岸が13%となっている。なお県北部の唐津市及び東松浦郡は生息歴史が浅く4%にすぎない。

つぎに生息数を営巣数からみると、県内の調査営巣数は5,951個であるが、調査もれを10%とすると推定営巣数は、ほぼ6,500個と考えられる。

表-1 カササギ営巣の県内分布

地域区分	該当市郡名	営巣数(個)				構成比(%)	営巣密度(1km ²)
		樹木	電柱	その他	計		
東部	鳥栖市 三養基郡	426	118	1	545	9.1	4.72
	神埼郡	498	179	2	679	11.4	6.41
	佐賀市 佐賀郡	1,150	1,672	5	2,827	47.5	12.03
西部	多久市 小城市	163	293	0	456	7.7	3.43
	武雄市 杵島郡	295	476	3	774	13.0	3.68
南部	伊万里市 西松浦郡	131	41	1	173	2.9	1.14
北部	鹿島市 藤津郡	138	121	2	261	4.4	1.56
北部	唐津市 東松浦郡	214	21	1	236	4.0	0.92
計		3,015	2,921	15	5,951	100	

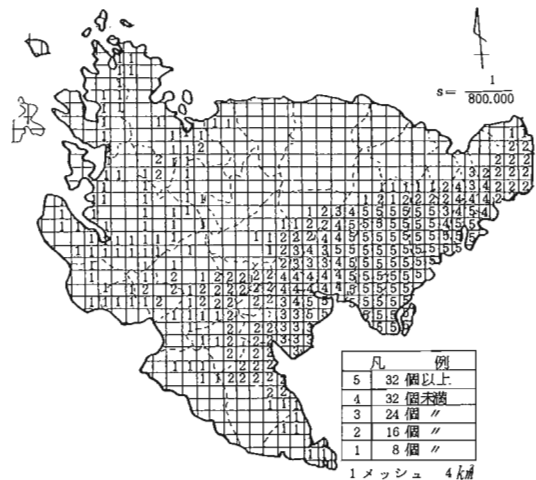


図-1 営巣分布頻度

したがって巣1個に番いがあることを前提とし、県内に生息するカササギの総数は13,000羽と推定され昭和50年の5,000羽に比してかなり増加している。

2) 営巣の種類

営巣の対象物としては、樹木が51%で、電柱その他は49%となっている(表-2)。

表-2 種別営巣数

種別 区分	樹木			電柱 その他	合計
	常緑樹	落葉樹	計		
巣量(個)	567	2,448	3,015	2,936	5,951
構成比(%)	9.5	41.2	50.7	49.3	100

カササギは、一般的習性として集落内や、平野部に点在する樹木の分枝(3~4枝)部分に営巣する。

今回の調査では、樹木51%、電柱49%となっている。これは、近年生息密度の高くなった佐賀市内や周辺の有明海沿岸で電柱への営巣が増加したためである。

3) 生息数の変化

カササギの営巣調査は、45年、48年、50年から53年、59年と実施されたが、45年から50年までは減少し県内で約5,000羽となっていた(表-3)。51年から増加がみられ約11年後の55年に45年なみの生息数となり、現在では毎年約10%増加しているものと思われる。

表-3 カササギ営巣数変化

区分	45年	48年	50年	51年	52年	53年	59年
県計(個)	4,002	3,401	2,194	2,376	2,775	3,410	5,951
45年対比	100	85	55	59	69	85	151

4) 被害状況

カササギは、雑食性であるが食餌による農産物の被害はみられなかった。

害はみられなかった。

しかし電柱営巣による停電事故やミカンの接木被害及びビニールハウスの破損等がみられた(図-2)。

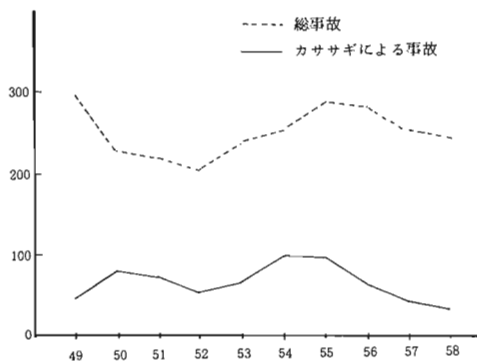


図-2 停電事故件数の推移

4. あとがき

近年人家近くに生息するカササギ等の鳥類の生息環境は良くなりつつあるなかで、佐賀平野の水田地域で土地改良事業が進められクリーク周辺に散生していた樹木が減少している。

このことから佐賀平野での営巣環境が悪化し、今後電柱への営巣が増すか、山麓地帯の樹木の多い地域での営巣が増すか今後も調査を続けることによって解明できるものとする。

引用文献

- (1) 松本光男：日林九支研論 29, 241~242, 1976
- (2) 松本光男：日林九支研論 30, 279~280, 1977